

Becoming a Translator: An introduction to the theory and practice of translation

著者 Douglas Robinson

出版社 Routledge

出版年 2003年(第2版)

頁数 301

ISBN 0-415-30033-9

評者 鶴田 知佳子(東京外国語大学)



著者はミシシッピ大学の英語学教授。本書のほかに、*Performative Linguistics*, *The Translator's Turn*, *Western Translation Theory from Herodotus to Nietzsche*などの著書があり、この本は2001年に出た版の第2版。第2版には翻訳ソフトウェアについての言及が入り、練習問題や、翻訳者が現場の問題にどう対応しているのかというメールでのやりとりが示され、参考文献が追加されている。

評者は大学で翻訳を教えるための教科書にならないかという思いからこの本を手にとったが、みごとにこの本はその期待にこたえている。

最後のところにわざわざ Appendix for Teachers としてこの本をどう教育目的に使ったらよいか書かれている。この部分が本の目的を良く表しているのだから引用すると、まず著者は、この本は翻訳と翻訳訓練の二つの間にあったギャップを埋めることを目的としており、「より早く、より信頼できる翻訳を、より楽しく」できるようにすることを教えるとうたっている。ただ、裏表紙で「理論と翻訳についての実践的アドバイスを融合する」となっているのはやや誤解を生む言い方で、この本の中で理論としているのはおもに Gardner の Multiple Intelligence Theory という教育心理学関連の理論であって、翻訳理論についての広範な言及はない。このほか、Charles Sanders Peirce の “instinct, experience, and habit” (直感、経験、習慣) に言及して経験と習慣を翻訳のプロセスに反映させられるかを考え、abduction (直感的飛躍) という Peirce の考えを、induction (帰納法) と deduction (演繹法) だけでは翻訳者の経験をすべて物語るに足らないとして導入している。第4章の翻訳プロセスでこの概念を導入したあとは、残りの章はすべてこの3つによる分析を取り入れている。

全体の章立ては第1章「知識：ユーザーの見方」、第2章「内部の知識：翻訳者の見方」、第3章「学習者としての翻訳者」、第4章「翻訳のプロセス」、第5章「経験」、第6章「人々」、第7章「作業する人々」、第8章「言語」、第9章「社会的ネットワーク」、第10章「文化」、第11章「習慣が失敗するとき」となっていて、付録として

翻訳関連のリソースリストと前述の教育者のための付録があり、参考文献と索引が続く。ちなみに翻訳関連のリソースリストは 2002 年 8 月現在と断りがあるが、日本関係では翻訳エージェントとして金融関係の一つが言及されている。このほか、支払い慣習やメーリングリスト、翻訳者協会一覧まで載っている。

だがこの本の一番の良さは、現場重視の立場と、楽しくなければ仕事にすべきでないという実践的なアドバイスが随所にちりばめられている点だ。実際に仕事をしている翻訳者からのアドバイスという形の、たとえば広告コピーはどう訳したらよいのかといったコラムも豊富で、先輩翻訳者の仕事の実感やメールチャットのやりとりが紹介されている。また、章により上手になるコツを盛り込んだという練習問題が多くあげられている。もともと、著者は自分も含めて翻訳者は正式な訓練を受けて翻訳者になるというよりも、翻訳を学ぶにはまず実務経験であるという立場をとっている。だがこの本では自己学習をしたい人の目的にもかなうように、練習問題をともかくやってみるようにと勧めている。

また、本の形ではなかなか得られないような、収入や実際に仕事につく上でのアドバイスなどの情報が満載されている。たとえば第 2 章の翻訳者の立場のところでは、翻訳者はどういう人たちか、どういう経緯を経て翻訳者になるのか、プロとしてのプライドは？ 依頼主が自分と意見が違う場合はどうするのか、倫理観の問題は、といった話題から、収入を確保するには、楽しいから仕事をするタイプか、生計をたてるためか、スピードが速い人はフリーランス、遅いならインハウスの翻訳者をめざすべき、などといったさまざまなアドバイスが盛り込まれており、随所に読み物としても楽しく読める工夫が凝らされている。

総合的にみてこの本は翻訳入門の教科書として最適である。評者は次に自分が大学で翻訳を教えるときは使おうと思っているし、他の教える立場にある方々にも勧めたい。さらに著者がうたっているように、自習書として手にとりたい人も楽しみながら翻訳実務について学べる書である。

筆者紹介：鶴田 知佳子 (TSURUTA Chikako) 東京外国語大学教授。日本通訳学会理事。AIIC(国際会議通訳者協会)会員。コロンビア大学経営学大学院卒業。経営学修士(MBA)、NHK 衛星放送通訳者、CNN 同時通訳者、会議通訳者。近年は実践に役立つ通訳教育法の研究に関心を持っている。
